３．公開授業

①１年生「けんかした山」２年生「きつねのおきゃくさま」１年生は、山の台詞をペープサートを使って発表することで、気持ちを読み取った。２年生は、文中の言葉から読み取ったことをまとめ、グループで話し合いながらきつねの気持ちの変化を読み取った。

②５年生「まんがの方法」６年生「ぼくの世界、きみの世界」５年生は、本文から「まんがの方法」とその効果を読み取り、それらをグループで話し合ってまとめていた。６年生は、書かれてある事例を基に、筆者が伝えたかったことをガイド話型を使って話し合い、まとめをホワイトボードに書いて比較検討していた。

③Ｋタイムでは、学芸会で発表する内容について、各自が発表する内容をカードに書いて提示し、そのカードを類型化しながら話し合いを進めた。

４．研究協議

「かかわり合いや話し合いの場を工夫することで子どもたちは、学びを深めることができたか。」「評価方法を工夫することで、子どもたちは、学びの深まりや広がりを実感することができたか。」を協議の柱とし研究協議を進めた。「直接指導から間接指導へわたる際の指示が明確であった。」「ガイド話型を用いることで、児童の話し合い活動がスムーズにできていた。」などの感想をいただいた。助言者からは、「グループで自分の考えを出し合い、比べながらまとめることで、集団自力解決の力が育っている。」などの講評をいただいた。

第５分科会　白老町立社台小学校

１．研究主題

「自ら学び、確かな学力を身に付ける子どもの育成」
～わかる国語科の授業づくりを通して～

２．研究内容

研究仮説１を「思考力・判断力・表現力育成のため、言語活動を数多く取り入れ、体験的・能動的に学習することにより、自ら学習を進める力を育てることができるだろう。」とし、言語活動を国語科単元指導計画に位置づける試みや、学校図書館を活用した多様で計画的な読書活動の充実を図ってきた。研究仮説２を「課題に対する自分の考えや見通し、学習の流れがわかるノート指導を工夫させることにより、自ら考え、問題を解決する力を育てることができるだろう。」とし、問題解決的な学習過程を生かしたノート指導の工夫に取り組んできた。研究仮説３を「評価を適切に行い、指導の改善に生かすことにより、児童が自分のよさを見つめ、進んで学ぶことができるだろう。」とし、適切な評価規準を設定し、自己評価などの多様な評価活動を取り入れながら、指導と評価の一体化を目指してきた。

３．公開授業

①中学年３年生「広い言葉、せまい言葉」／写真を手がかりに、トンボよりも「広い言葉」が「昆虫」であることを理解した。４年生「アーチ橋の仕組み」／接続詞に着目して、石のアーチ橋のつくり方を読み取り、説明書を書いた。

②高学年５年生「森を育てる炭作り」／日本の炭焼き技術によって、海外の村に起きた変化について読み取りまとめた。６年生「人類よ、宇宙人になれ」／「人類進化のとるべき道」について筆者の考えに対して、自分の考えをノートに書いて交流した。

４．研究協議

間接指導時におけるリーダー学習について、リーダーの役割の明確化の重要性や、その形態や定着に関して意見が出された。また、ノート指導については、ワークシートの導入に関して意見が出された。助言者からは、間接指導時のリーダーの育成と練り合い活動、ノート指導における板書の重要性、自己評価活動の活性化などについて、講評をいただいた。

第６分科会　苫小牧市立樽前小学校

１．研究主題

「自ら学び　思いを生き生きと表現する子の育成」
～少人数による国語科での学び合いを通して～

２．研究内容

研究仮説を「少人数における学び合いを通して、一人一人が学ぶ力を身に付けることにより、課題意識をもって主体的に学習に取り組むことができ、学ぶ喜びや伝える喜びを感じながら自分の思いを生き生きと伝え合うことができる。」とした。

３．公開授業

①国語科１・２年生「たからものを知らせ合おう」、３・４年生、「一つの花」５・６年生「ぼくの世界、きみの世界」

②生活科、総合的な学習の時間「樽前っ子広場」

○１・２年生「くさばなあそび」樹木や草花などの自然に親しんだりそれらを使って遊んだりする。

○３・４年生「ペットボトルいかだ４Ｒ」ペットボトルいかだの制作を通して、ゴミ問題に関心をもち進んで調べ、環境保全していこうとする態度を養う。

○５・６年生「桑の実ジャムの販売」桑の木を調べ、桑の実の採取からジャムづくり、そして販売までを通して樽前の自然を学ぶ。

４．研究協議

１，２年生は、子どもの個性をうまく引き出すことができていた。３，４年生は、一人一人に寄り添いながら授業を進めていたことが印象的で、５，６年生は、一文一文しっかりと読み取り、進めていたことが子どもたちの力になっているとの声をいただいた。助言者からは、①主体的な学びにおいて、教師が意図的・計画的に児童の思考を深めるために、相違点を明らかにしていく指導も考えていく必要がある。②研究の成果と課題をもとに子どもの側に立った教育課程を編成していくことが大切である。との講評をいただいた。

第７分科会　安平町立富岡小学校

１．研究主題

「自ら学び、伝え合う児童の育成」～算数科におけるコミュニケーション活動を生かした授業づくりを目指して～

２．研究内容

研究仮説は以下の３点である。①「学習過程を定着させることによって、児童一人ひとりが安心感をもち、主体的に学習に取り組むことができるであろう。」②「児童の力を十分に把握し、的確に働きかけることを通して、効率的かつ効果的な自力解決に向かうことができるであろう。」③「児童の考えを交流する場を適切に確保することによって深め合うよさを感じながら自己を高めようとすることができるであろう。」

３．公開授業

①低学年（１・２年生）　１年生は「どちらが長い」、２年生は「計算のしかたをくふうしよう」の単元で、１年生は具体物の操作、２年生は計算の順序の工夫を通して主題に迫った。

②中学年（３年生）　「三角形」の単元で、教師とのマンツーマンの授業の中で、パソコンや写真など、様々なツールを利用しながらの伝え合う授業を行った。

③高学年（５・６年生）　５年生は「整数の性質を調べよう」、６年生は「分数のかけ算を考えよう」の単元で、５年生は公倍数の見つけ方、６年生は真分数×真分数の解き方を考える活動を通して伝え合う活動を取り入れ、深め合う場面を公開した。

４．研究協議

協議の柱は、「児童が自ら学び、伝え合うために、発達段階に応じたコミュニケーションの場をどのように設定していけばよいか。」「少人数指導の特性を生かし、効果的な実践を行っていくためには、どのような実践が考えられるか。」とし、協議を進めた。参加者からは、「交流活動の充実に向けた準備の工夫」、「複式指導における軽重をつけた授業のための、指導計画の組み替え」などに関する質問や意見が出た。助言者からは、「間接指導に入る学年の順番」、「個別指導の具体的な手立て」、「問題把握や、取り組みに関する可視化の工夫」などに関する講評をいただいた。

第８分科会　厚真町立軽舞小学校

１．研究主題

「自ら学び、自ら考える児童の育成」～少人数の特性を生かした授業のあり方～

２．研究内容

研究仮説１「一人ひとりの学習状況を把握し、個に応じた指導・支援を工夫すること、また、言語活動を充実させることで、子ども自身が課題を解決していく